〈論　文〉

コネマラ地方の発見

―― 西アイルランド辺境をめぐる旅行記に関する一考察 ――

中村哲子

The 'Discovery' of Connemara and Travelogue on the Wild West of Ireland

Tetsuko NAKAMURA

（2011年1月12日受理）

1．コネマラとは

コネマラ（Connemara）は西アイルランドに位置するゴールウェイ州の西端の郡、つまり北はキラリー湾（Killary Bay）、南はキルキアラン湾（Kilkieran Bay）によって囲まれた大西洋に突き出た地域だが、一般にゴールウェイ市の西に広がる地域一帯の呼び名として知られている（次頁参考地図参照）。アイルランド語ではConamaraであり、その語源は中世期の地元部族名、Conmhaícne Mara（英語でThe Conmaicne of the Seaの意味）に由来しているという（Robinson, 2006, pp. 300-02）。

コネマラ地方を特徴づけるものは、なんといっても中部から西部にかけて永遠と続く泥炭地と「12の頂」（The Twelve BensあるいはThe Twelve Pins）と呼ばれる12の裸山が連なる山脈を臨む荒涼とした土地である（写真1参照）。現在、国道N59が、ゴールウェイ市と西の先端にある人口約1400人のクリフトン（Clifden）までの80キロメートル足らずを結んでおり、一帯は夏場の観光地として、特にアウトドア・スポーツ愛好家に人気が高いことは国内外に知られている。

写真1：「12の頂」を臨む

この荒涼とした辺境の地に、旅行者が苦労しながらも訪れるようになり、その類まれな

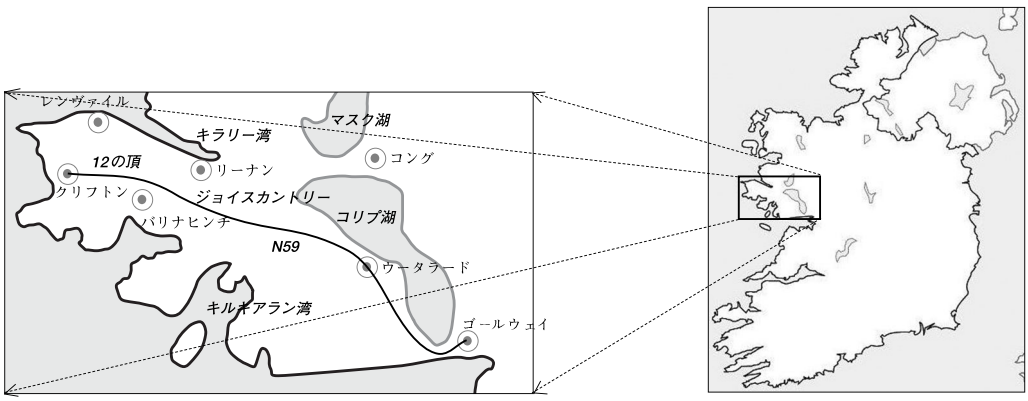
日本医科大学・外国語教室　Department of Foreign Languages, Nippon Medical School

風景と独特な文化圏についての情報が流布するまでになったのは、200年近く前の1830年代のことである。そして1840年代に入って、コネマラはようやく旅行先としてイギリスで広く認識されるようになり、作家や著述家も足を踏み入れる土地となっていく(Williams, 2008, p. 164)。

コネマラへの関心が高まった背景には、そもそもアイルランドが旅行先として注目されるようになってきた事実がある。1760年あたりから、イギリス本国からアイルランドへの旅行者が増えはじめ、フランス革命による大陸の政情不安やナポレオン戦争のために大陸との行き来が困難になったことで、旅行先としての人気に拍車が掛かる(Hooper, 2005, pp. 1-3; Williams, 2008, pp. 7-14)。さらに、1822年から、ゴールウェイ州、メイヨー州、スライゴー州といった西アイルランド辺境において、埠頭や道路などを整備する国家開発プロジェクトが始まり、1830年代前半にようやくゴールウェイからクリフトンまでを結ぶ幹線道路整備が進んだことも、この地域への関心を高める一助となった。このプロジェクトの責任者となったのが、スコットランド人の技術者アレグザンダー・ニモ(Alexander Nimmo)である。彼はすでに、アイルランドの近代化を目指して政府が設立した泥炭地開発委員会(Bog Commission、1809年設立)やアイルランド漁業局(Irish Fishery Board、1819年設立)が展開する調査・開発計画の責任者を務めていた。

実のところ、1801年にアイルランドを併合したイギリスは、アイルランドの実態を正確に把握し、さまざまな側面で本国より遅れているアイルランドの状況を改善する必要性に迫られていた。各地の人口を確定して税金の徴収をつつがなく行うことも重要な課題であった。こうした実態調査には、人や物の流通が滞りなく行われるためのインフラ整備が全国規模で求められ、一連の調査結果に応じて、各地で農業や漁業の近代化が進められることになっていく。ニモはこうした情勢の中で、公共事業とも呼べるプロジェクトに関わっていったのである(Villiers-Tuthill, 2006, pp. xiii-xv)。特に西アイルランドでは、土地が痩せているために

参考地図



コマネラ地方　　アイルランド

住民の暮らしは最低水準にあり、しかも、1820年前後には天候不順による不作のために住民は大きな打撃を受けていた。まさに地元への経済支援の役割も担う公共事業であったと捉えられる(Villiers-Tuthill, 2006, pp. 57-58)。残念ながら、この開発計画は総括的に見れば失敗といってもいいものであった。あちらこちらで工事が同時進行で進められ、莫大な費用がつぎ込まれたもののニモの力量ですべてを統括することは困難で、1831年には職を解かれるにいたる。その時点ではゴールウェイ―クリフトン線は未だ完成しておらず、1835年の前半になってようやく完成を見るにいたる[1)]。興味深いことに、まさにこの道路が完成するかしないかという時期、つまり、道路状況についての不正確な情報が流布する中で、ゴールウェイの西に広がる土地へ出かけた旅行者が旅の一部始終を書き記し、刊行するようになるのである。

2．コネマラの旅への関心の高まり

1830年代より以前にコネマラへ足を踏み入れ、旅行記を著した人物がいなかったわけではない。1796年から1797年にアイルランドを巡ったフランス人、ジャック・ルイ・ドゥ・ブーグルネ・ドゥ・ラ・トクネイ(Jacques-Louis de Bougrenet de La Tocnaye)が、当時アイルランド最大の地主で「コネマラ王(King of Connemara)」とも呼ばれた大物国会議員、リチャード・マーティン(Richard Martin, 1754-1834)をコネマラ中部のバリナヒンチ城(Ballynahinch Castle)に訪ね、さらに、コネマラ北西に位置するレンヴァイル(Renvyle)まで足を伸ばしている[2)]。すでにイギリス旅行記を著していたドゥ・ラ・トクネイはアイルランド旅行を勧められ、いってみれば観光目的で各地をめぐり、その様子を『フランス人のアイルランド逍遥』(*Promenade d'un Français dans l'Irlande*)と題するフランス語による旅行記として1797年にダブリンで出版している。評判がよかったのであろうか、その英訳本が1798年にコークで、その翌年にロンドンで刊行されている。彼は外国人という立場で、レポーターのごとくに読者の興味をそそるような未知の土地の話を広く伝えることに喜びを見出していたのかもしれない。当時のコネマラ内の移動が困難をきわめたであろうことは、時代を下った1830年代の旅行記からも容易に推察できるが、こうした厄介な状況を語る描写は不思議なぐらいリアリティーを欠いている。楽天的な性格の人物であったのだろうか、わずかに、泥炭地のために馬を降りざるを得ないことがたびたびであったことや、道が途中で消失していることがあるなどがあっけらかんとしたタッチで書かれている(1917, pp. 170-71)。

しかし、ドゥ・ラ・トクネイのようにコネマラをまさに観光目的で旅することは当時まだまだ例外的であった。18・19世紀のアイルランド旅行記といえばまず筆頭に挙げられ、その精緻な記録が重宝される『アイルランド旅行記』(*A Tour in Ireland*, 1779)を著したアーサー・ヤング(Arthur Young)は、ゴールウェイより西の地域に入り込んではいない。コネマラ海岸沿いの漁業について、わずかに言及しているのみである(I, pp. 341-42)[3)]。ヤングの目的は、各地の農業を中心とした産業の実情を取材して記すことであり、取材旅行が1776年から79年にかけてのことであることも手伝ってか、これといった産業のないコネマラを見て歩く必要はないとの判断があったものと推察できる。当然ながら、この地域の交通網の未発達も

その判断を後押ししたのであろう。

このように、旅行の目的がコネマラに見るべきものがあるかなしかを決める要因の1つになっていることが見て取れるが、1830年代のコネマラへのまなざしについては、1829年のカトリック解放法成立との関連も無視できない。コネマラは圧倒的にカトリック信徒が多い地域であり、住民は基本的にアイルランド語を母国語としていた。そもそもゴールウェイはアイルランドに移住してきたノルマン人によって建設された町であり、1300 年頃に「ゴールウェイの部族」(Tribes of Galway) と呼ばれる14の豪商が統治する体制が整った。プロテスタントのイギリス国教会設立後、16世紀半ば以降はイギリス本土からアイルランドへの植民が増え、彼らアングロ・アイリッシュが支配者層として勢力を伸ばす中にあっても、この地域一帯では17世紀末においてもカトリックを信奉する地主が力を維持していたのである (Kelly, 1996, p. 229)。17世紀には土着のオフラハティー一族 (O'Flaherty) が徐々に勢力を弱め、コネマラ一帯は豪商の家系を継ぐ4家によって大方の土地が占有されることとなった。この4家とは、先のリチャード・マーティンがその子孫にあたるマーティン家 (Martin)、13世紀終わりにウェールズから移住してきたノルマン人のジョイス家 (Joyce)、元来ゴールウェイ州の東部を拠点としていたダーシー家 (D'Arcy)、そしてゴールウェイ市長を数多く輩出しているブレイク家 (Blake) である。いずれもカトリックの家系であり、例えば、リチャード・マーティンが代々の当主の中でプロテスタントとして幼い頃から教育を受けた最初の人物であることは、この地域の文化的環境を如実に語っている。

実際カトリック信仰への関心が、1830年代に旅行者を西アイルランドへいざなった例に触れておきたい。ダブリンからメイヨー州のアキル島までの旅の様子をまとめたシーザー・オトウェイ (Caesar Otway) による『コナハトへの旅』(*A Tour in Connaught: Comprising Sketches of Clonmacnoise, Joyce Country, and Achill*, 1839) である。オトウェイは国教会牧師であり、カトリック反対派の急先鋒として1825年に『クリスチャン・エグザミナー誌』(*The Christian Examiner and Church of Ireland Magazine*, 1825-1869) の編集・刊行を始めた人物である。1827年に、アイルランド北部と南部を旅した記録、『アイルランド素描』(*Sketches in Ireland: Descriptive of Interesting, and Hitherto Unnoticed Districts, in the North and South*) を出版しており、10年以上を経て、再び旅行記を公にしたのである。この西アイルランド旅行で、オトウェイはアイルランドにおけるキリスト教の聖地ともいえる修道院の大伽藍跡、オファリー州のクロンマクノイズ (Clonmacnoise) に立ち寄り、さらに、コネマラへの東の玄関口とも呼べるコング (Cong) で古の修道院を訪ねている。彼はプロテスタント信仰と対照させながら、批判的な視点からカトリック信仰に関する見解を書き記した。コネマラ奥地まで足を踏み入れることはなかったが、コリブ湖 (Lough Corrib) の西に位置するジョイス・カントリー (Joyce Country) を巡る記述を3章にわたって展開している。

この旅が宗教的な目的を持ったものであることは、最後の6章 (Otway, 1839, pp. 346-428) にわたるアキル島行きについての記述に特に明確に示されている。オトウェイは、この旅の大きな目的が、カトリック信仰の根強いこの島に植民した国教会信徒の生活ぶりを身近に知

ることだと明言しているのである(p. 358)。カトリックを信奉する地域へのアクセスが可能となることでプロテスタント信徒が流入し、その地域のありようが変化していく姿が示唆的に描かれ、まさに、交通網の拡大が文明化につながるとする捉え方が読み取れる。アイルランドのカトリック信徒のありように変革をもたらしたいとするオトウェイの意図が伝わってくる著作でもある。

ここで、1830年代のコネマラ旅行記登場に直接的な影響を与えた著作に目を転じてみたい。実は1820年代、オトウェイの目的地ともなったメイヨー州やコネマラ地方の風物や文化を描いた作品が3点刊行されているのである。それぞれ趣は異なるものの、いずれも旅行記の要素を多分に含んだものとなっている。1つは『アイルランド高地からの手紙』(*Letters from the Irish Highlands*, 1825)と題された49の書簡からなる350ページを越える著作で、先のブレイク家の子孫であるヘンリー・ブレイク(Henry Blake)とその妻らが、1811年にイングランドからレンヴァイルに居を移した後に手がけたものである。レンヴァイルは14世紀からオフラハティー家が支配していた土地であった。そのため、13世紀から続くコナハトの大豪族であるブレイク家が17世紀末にここを購入した後も、実質的にはオフラハティー一族が占有を続けていた[4)]。しかし、ヘンリーがこの地を訪れた際に気に入って移住を決意、実験的な牧畜業を展開することで知られることにもなった。コネマラに居住しながらも外部から移り住んだ者の視点で、コネマラ独特の風物がこの『手紙』に語られている。ブレイクは、まだ見知らぬ土地をまるで旅行者のように巡り、すばらしい景色、めずらしい慣習、土着の人々の暮らしを知り、この地に住む地主を訪ね交流を深めていく。地元について語る文章ではあるが、実質は外部者が著す旅行記とも捉えられる。出版の目的については、その序文で、イギリスに併合された隣のアイルランドの実態をイングランド人に伝えることがアイルランドをよくする第一歩であると次のように語っている。'As the improvement of Ireland necessarily depends upon England, the first step towards that improvement must be, to make our English brethren acquainted with the true state of this portion of the empire' ([Blake], 1825, p. xv). ブレイクがイングランド人の視点から、イングランド向けにこの著作を刊行しようとしていたことがわかる。さらに序文では、コネマラがほとんどイギリスで知られていないことに触れるとともに、その類まれな自然の美しさが第一級のものであり、旅行者が大いに感嘆するはずのものであることを次のように書いている。

> Yet we have seen this wild country excite the admiration of travelled and intelligent strangers: we have heard it compared to the finest parts of Wales or of Scotland; and we have felt how it fixes the affections of those who have resided some time amid its romantic picturesque scenery, and who, from natural or acquired taste, enjoy 'the lone majesty of untamed Nature'. ([Blake], 1825, p. xviii)

手が加えられていないコネマラの自然の美しさが、18世紀末にウィリアム・ギルピン(William Gilpin)らによって新たにその自然の美が発見されたウェールズやスコットランドに劣らぬものだとの認識が示され、この地域がピクチャレスクへの志向に合致する点を明示している点は注目すべきである。

この著作が1825年という、カトリック解放法設立への兆しが明確になりつつある時期に書かれている点も看過できない。序文の最後で、カトリック解放についての意見はさまざまであろうからと、この問題については一切触れないと念を押している(p. xviii)。この言葉は、コネマラがカトリック信仰と切っても切り離せない土地であることへの言及となっており、こうした文化的伝統をはぐくんでいる土地が、イギリス人読者にとって関心を引くものであったことが読み取れる。

同年には、コネマラを舞台とした小説も刊行されている。この作品は、エア・エヴァンズ・クロウ(Eyre Evans Crowe)の『今日のアイルランド』(*To-day in Ireland*)と題された小説集に収められた『コネマラ』(*Connemara*)である。この3巻本の小説集は著者不詳として刊行され、序文も添えられていないことからその出版の意図は明確ではない。しかし確かなのは、イングランド生まれながらもアイルランド人を両親に持ち、トリニティ・コリッジ・ダブリンで教育を受けたクロウが、自身のよく知るアイルランドを舞台とした作品をロンドンから発刊したという事実である。『コネマラ』は、明らかにリチャード・マーティンをモデルとした人物、「コネマラ王」と呼ばれる国会議員を中心に、彼が選挙を控えてイングランドからコネマラに帰郷した際のできごとを扱ったものである。コネマラに特徴的ともいえる密輸を仕切る地元民を登場させ、恋愛沙汰や親子関係の発覚といった展開を織り込みながら、豪放磊落な領主の横顔を浮かび上がらせているが、ここでは、ロンドンから地元に帰る旅という要素が物語の軸となっている。

リチャード・マーティン本人は、後にジョージ4世となる皇太子とも近しい間柄にあり、決闘好きでも知られ、1822年には俗に「マーティン法」(Martin's Act)と呼ばれる「家畜愛護法」(Ill-Treatment of Cattle Bill)を議会で成立させるなど、話題には事欠かない人物であった。まさに彼のイメージがコネマラと結び付けられた作品がこの『コネマラ』だと捉えられる。アイルランド最大の地主として、そして話題に上ることの多い国会議員として知られるリチャードという存在があればこそ、人の立ち入るには厄介なコネマラを舞台にイメージが先行する物語展開が繰り広げられ、この地域に住む人々のありようがフィクションの助けを得て膨らまされているのである。

もう1点、コネマラへの関心を高める牽引力となった書物がある。それは、1832年刊行のウィリアム・ハミルトン・マックスウェル(William Hamilton Maxwell)が著した『西部のアウトドア・スポーツ』(*Wild Sports of the West*)である。アイルランドで生まれ育ち、トリニティー・コリッジ・ダブリンで教育を受けたマックスウェルは、ロンドンで執筆活動を展開、すでに『ウォータールー物語』(*Stories of Waterloo*, 1829)といった戦争小説をヒットさせていた。『西部のアウトドア・スポーツ』では、あるイングランド人がメイヨー州に出向いたイ

ングランド人の友人から受け取った54通の手紙がまとめられているという設定になっている。自然豊かな土地の風物や人々の暮らしのありようが描かれ、西アイルランドを語るにふさわしいさまざまな逸話も織り込まれている。手紙の書き手が滞在拠点とするのは、アキル島の北に広がるブラックソッド湾の湾沿いに位置するいとこの館であり、彼に15年ぶりに会うためにこの辺境まで出かけたとされている。ロンドンで刊行されたこの2巻本が、西アイルランドを知らないイングランド人を第1の読者層としていることは明らかである。釣りや狩りの話題をふんだんに盛り込んだこの作品は、19世紀を通じて人気を博し、出版後1世紀の間に十数回にわたり再版されている。他の地域ではかなわぬ自然との触れ合いが可能な場所として、その自然のすばらしさを前面に押し出している点で、この作品が西アイルランドの新たな魅力を広く訴えるものとなったことは認識しておくべきである。

ここで注目すべきは、『アイルランド高地からの手紙』と『西部のアウトドア・スポーツ』が、ともに書簡によってその土地の様子を外部者に知らせるという形式をとり、旅行記とも呼べる枠組みの中で捉えることができる点である。前者はイングランドからの移住者による語りであり、その土地の風物・慣習が依然として目新しいものとして描かれている。後者では作品冒頭の第1書簡に「自伝」(Autobiography)と副題が付けられ、書き手がなぜメイヨー州の奥地まで出かけることになったかが語られる。めずらしい事象について語る際には、それを目にしたことのない外部者の視点が必要不可欠であろう。つまり、著者はガイドブックのごとく事物の紹介をするのではなく、語りの魅力で読者をひきつけようと外部者の視点を明確にする仕掛けを用意し、小説に近い語りをとおして目の前の新奇なものに対する驚きの念を信憑性を持って提示しようとするのである。西アイルランドに関する著作という点で、この2作品はこの後に登場するより明確に旅行記の枠組みを持った著作へと道を開いたといえよう。

旅行記とは何かという問いに答えることはきわめてむずかしい。フーパーによれば、それぞれのテクストは別の意図を持って異なる枠組みで提示されており、「旅行記」というジャンルは流動的で確固たる定義を許さないものであるという(Hooper, 2005, p. 3)[5)]。興味深いことに、1830年代に発刊されたガイドブックの体裁を持つ刊行物が、当時、書評で旅行記に類するものとして捉えられ、読んで楽しめる語りが不足していると指摘されている例が見られる。それは、1838年発刊のジェイムズ・フレイザー(James Fraser)の『アイルランド・ガイド』(*Guide through Ireland*)である。これはダブリンで出版された641ページという大部な1巻本で、アイルランド全土の観光案内としてコネマラに関する記述もそれなりに含まれている。巻末には付録として植物や鉱物に関する詳細な解説、さらには、道路、川、山などの名前のリスト、そして詳細な索引が付されている。しかし『リテラリー・ガゼット誌』(*The Literary Gazette*)に掲載された書評では、次のように語りの必要性が示唆されている。'On the whole, however, we believe that Mr. Fraser's *Guide* will prove a useful hand-book for tourists; although we cannot help feeling that, even within the same limits, much more might have been done to enrich the matter, which appears to us too cold and statistic for an agreeable

travelling companion' ('Review', 1839, p. 553). ここからは、当時の読者がガイドブックに旅行のためのレファレンス・ブック以上のものを求めていた様子が読み取れる。

1830年代に登場するコネマラ旅行記として捉えられるテクストの周辺では、コネマラについての語りを支えるさまざまな文化的環境が整えられていた。人々が抱く関心のありかとは、当時この地域を代表するともいえる話題の人物であったリチャード・マーティン、カトリックの伝統や土着のアイルランド人の持つ独特な風物や慣習、そして、イギリス本土有数の風光明媚な土地に負けず劣らずの美しい自然、そしてそこで楽しめるアウトドア・ライフといったものであった。交通網の整備をきっかけにより多くの人々がこの地を直接体感し、その体験を多くの人々と共有できるようになっていったのである。

3．コネマラ旅行記の広がり

1830年代にコネマラの旅について記されたテクストは、先に触れたオトウェイの『コナハトへの旅』に含まれるジョイス・カントリーに関わる記述、そしてフレイザーの『アイルランド・ガイド』に含まれるコネマラ各地の紹介に加えて、筆者の現在までの調査によれば8点が存在する。テクストの詳細は論文末に＜資料＞として示したが、1834年にマライア・エッジワース（Maria Edgeworth）が弟宛ての手紙にしたためたコネマラ紀行とも呼べるテクスト以外は、コネマラを最終目的地として設定したものではない。その他は、アイルランド各地をめぐる道程にコネマラが含まれていたと考えるべきものである。

最も初期のテクストは、1832年に出版されたピュックラー・ムスカウ公（Prince Hermann Ludwig Heinrich von Pückler-Muskau）の1828年から1829年にかけてドイツからイングランド、アイルランド、フランスをめぐった記録の英訳本である。依然としてコネマラの交通網が整っていなかった時期であり、彼がダブリンからめざした西アイルランドの旅は、ゴールウェイ近辺から南へ下ってキラーニーを巡るものであった。しかし、彼がコネマラの玄関口であるコングを訪ねるため、ゴールウェイの南に位置するバリンダリーン（Ballinderreen）から北西へ4時間もの時間をかけて出かけ、マスク湖（Lough Mask）とコリブ湖を目の前にコネマラのすばらしい景色を堪能しようとした事実は注目に値する（Pückler-Muskau, 1832, p. 244）。コングでは修道院の廃墟を見て回るが、最も紙面が割かれているのは、ピジョン・ホール（Pigeon Hole）と呼ばれる洞窟で繰り広げられる老婆によるある種のアトラクションの様子である。

現在もコング近郊の観光資源の1つといえるこの洞窟は、地下30メートルほども降りたところに広がっており、そこにはマスク湖からコリブ湖へと流れる地下水路が通っている（写真2と3参照）。当時このまっくらな洞窟の中で、観光客相手に老婆が藁に火を灯して水面に投げ、その光で洞窟の中を照らしてその神秘的な雰囲気を楽しませる見世物を行っていた。ムスカウ公はそこに1匹の白いマスが泳いでいるのが見えたと記しており、それがだれも捕らえることのできない魔法のマスであるという言い伝えについても言及している（p. 247）。この「コングの白いマス」伝説によれば、白いマスはある女性が恋人を失ったことを嘆いて

変身したものであり、このピジョン・ホールにずっと住んでいるのだという。この伝説はサミュエル・ラヴァー（Samuel Lover）が編纂した『アイルランドの伝説と物語』（*Legends and Stories of Ireland*）の第1集（1831）に収められて以降、広く知られるところとなった。はたして著者がこの伝説を理解した上で言及したのか、訳者による脚色が含まれているのかは不明だが、少なくともマスについての言い伝えがあることが示唆されるテクストとなっている。地上とは別世界の暗い地下深くの空間、怪しげな老婆、不気味に洞窟の壁を照らす揺らぐ灯火、その中で泳ぐ白いマスと悲しい伝説。こうした組み合わせの妙が、古の修道院よりもこの旅行者の心を捉えたようである。他ではなかなか体験できないパフォーマンスであり、そこに漂うミステリアスで不気味な雰囲気は、18世紀末に最盛期を迎えたゴシック小説が描くカトリックの世界が醸しだすイメージと重なってくる。まさに、西アイルランドのイメージを凝縮したような一場面と捉えることが可能であろう。

実はコングはゴールウェイからメイヨー州へ向かう途中に位置し、ジョイス・カントリーへもつながる交通の要所ともいえる場所である。そのため、＜資料＞に示した旅行記の中でコングとピジョン・ホールの洞窟への言及がまったく見られないのは、唯一1836年出版のウィリアム・バロー（William Barrow）の旅行記のみである。それも、コリブ湖の東と西を行き来するのに彼がコング経由の陸路を使わず、コリブ湖の湖幅が狭いところを船で渡ったためである。バローが修道院の遺跡や伝説に彩られた土地に興味を持たなかったともいえるが、一因は1834年刊行のヘンリー・D・イングリス（Henry D. Inglis）の旅行記にあるとも考えられる。バローは旅行の際にイングリスの著作を持参しており、自ら目にした事実との差異について自身の旅行記の中でしばしば言及している。イングリスはコングを通って洞窟も訪ねているが、大して見るべきところはなかったとひとことで済ませているのである（Inglis, 1838, p. 229）。その一方で、ピジョン・ホールでの老婆のアトラクションがムスカウ公のテクストと同じ演出のものとして登場するのが、ウィリアム・ビルトン（William Bilton）、エッジワース、そしてオトウェイの著作、さらに、作者不詳の『アイルランド旅行者』（*The Irish*

写真2： 洞窟の底から入り口を臨む

写真3： 地下水路

Tourist, 1837）である。『アイルランド・ガイド』でも灯火を水面に流すことで洞窟内部が見えるといった指摘があり、同じアトラクションへの言及であると理解できる。サミュエル・ファーガスン（Samuel Ferguson）の記事でもこの洞窟の様子は丁寧に描かれている。

このように、旅に関する情報はその情報を得て旅する旅行者の行動に影響を与え、情報の追加と再生産の過程で取り上げられる場所を固定化していく力を持つ。実際、先に触れたブレイクの『アイルランド高地からの手紙』とマックスウェルの『西部のアウトドア・スポーツ』は、＜資料＞に挙げたコネマラ旅行の10点のテクストで繰り返し言及されており、この2作品の影響が大きかったことが読み取れる。またこの10作品についても、すでに刊行されたものが後発のテクストで触れられる例が頻繁に見られる。特にダブリンのウィリアム・カリー（William Curry）出版の3点、つまり、ファーガソンとオトウェイの著作とフレイザーの『ガイド』はそれぞれが形態や役割を異にしていることもあり、相互補完的に読者の便に利するとする言及が序文などで示されている。

こうした情報のネットワークの中で最たるものは、著者が実際に旅を経験せぬまま、それまでに登場した旅行記のテクストを活用して新たに再構築したテクストであり、そのフィクションによるテクストが実際に旅行者をその地にいざなう力を持つことになる事実である。『アイルランド旅行者』におけるピジョン・ホールの描写には、明らかにムスカウ公のテクストを利用して微妙に表現を書き換えた一節が登場する（Nakamura, 2010, pp. 24-25）。前者は基本的に青年向けの読み物で、コナハト、マンスター、アルスター、レンスターのアイルランド4地方をそれぞれ舞台とした4作品で構成された1巻本である。それぞれの作品が旅行記の体裁を取っているが、その実フィクションなのである。4作品の中でコナハトの物語として展開するのがコネマラを舞台としたもので、地元の地主の息子が仕事のためにメキシコに出かけ、そこで知り合ったスペイン人の友人を自分の故郷へ招いたところから物語は始まる。そのスペイン人がコネマラ一帯を巡る設定になっているのである。

ある地域について、外部からの訪問者がその見聞を記録するという語りの枠組みは、ダニエル・デフォー（Daniel Defoe）の『ロビンソン・クルーソー』（*Robinson Crusoe*, 1719）やジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift）の『ガリバー旅行記』（*Gulliver's Travels*, 1726）に代表されるような、英語で書かれた最も初期の小説の基盤となっている。一人称の語りによってその経験をつまびらかにする手法は、日記や旅行記の枠組みの中でフィクションと融合し、その後の書簡体小説の登場へとつながっていく。まさにコネマラを語るテクストについても、この地域への一般の関心が徐々に高まる中、情報を広めるために日誌や手紙の形式が採用され、その後、未知の土地の魅力を読者に訴えるべく辺境への旅の語りにフィクションが織り込まれるようになる。旅行記は幅広い読者にめずらしい土地のありようを知らせるための発信媒体であるとともに、さまざまな要素を自由自在に受け入れることのできるジャンルだといえよう。このことが、コネマラという長く外部に閉ざされてきた地域について語るテクストを眺めることで明確に浮かび上がってくる。

旅の語りの醍醐味とは何なのかと考えてみれば、先の『アイルランド・ガイドブック』の

書評も示唆するように、その土地の人々や風物について読者が実感を得られる語り口で語られていることではなろうか。このことは、1830年代のアイルランド旅行記として一般に大きな影響を与えたイングリスの『アイルランド全土をめぐる旅』(*A Journey throughout Ireland*, 1834)を読むと実感できる。多くの雑誌がこの旅行記の書評を掲載しており、その人気は1838年までに5版を数えていたことからも推測できる。出版当時、すでに彼は数多くの旅行記を発表したスコットランド人旅行家として知られ、旅行記を出版する目的でアイルランドを旅したことは明らかである。というのも、ダブリンから時計回りにキルケニー、コーク、キラーニー、リメリック、ゴールウェイ、スライゴー、ドネゴール、ベルファストから再びダブリンへというように1834年の春から秋にかけてアイルランドを回り、その年の暮れまでに約400ページという厚さの書物を出版しているからである。旅行のプロフェッショナルが、旅行記出版のための取材旅行としてアイルランドを旅したと考えられる。だからこそ、長年旅行者が足を踏み入れなかったコネマラをも時間をかけて巡ったのであろう。その後イングリスの二番煎じを試みたのがバローであり、前年上梓されたイングリスの旅行記を抱え、イングリスとは逆に反時計回りにベルファストからダブリンまでをわずか1月半でぐるりと旅している。その旅程は書簡体で書かれた『アイルランド旅行』(*A Tour round Ireland, through the Sea-Coast Counties, in the Autumn of 1835*, 1836)から明確に追うことができるが、残念ながらこの旅行記は版を重ねることはなかった。

イングリスとバローの語りの魅力の差異は比較的容易に感得できる。それがわかる次に挙げる両者のテクストは、ジョイス・カントリーを支配するジャック・ジョイス(Jack Joyce)が住むリーナン(Leenane)へ向かう途中のキラリー湾沿いの風景に関する描写である(写真4参照)。両者がほぼ同じ語数で、氷河によって形成された独特な地形について語っている箇所である。イングリスが景色を彷彿とさせる流れのある語りを展開する一方で、バローはイングリスの旅行記を片手にどちらかといえば歯切れのよい説明的な描写を残している。

> The Killery is a narrow deep inlet of the sea, reaching far up into the country, and bounded on both sides, and throughout its whole extent, by a range of mountains nearly as elevated, and of as picturesque forms, as any in Ireland. It may easily be conceived how great the attractions of this scene must be. It is of an entirely novel character; and resembles more the scenery of a Norwegian *Fiord*, than any thing I know nearer home. The inlet is not above an English mile across; several parts of the mountain boundary rise abruptly from the water; but there are here and there clefts and hollows, which discover more elevated peaks beyond, and show the breadth and extent of the range. (Inglis, 1838, pp. 248-49)

> We soon came in sight of the Killery harbour. This is a singular inlet of the

> sea, running up eight or nine miles into the heart of the mountain, like a narrow, deep canal, in which the largest ship of the line may find water enough, but the width is not more than three-quarters to one-eighth of a mile. It is hemmed in on one side by the base of the mountain-peaks of the Pins and their branches, and on the other by the Muilrea, and the mountainous promontory of Morrisk. It thus bears a nearer resemblance to a Norwegian fiord than any other inlet I have seen out of that country, — far inferior, however, to those noble fiords of Norway, so many of which I crossed two years ago. (Barrow, 1836, pp. 229-30)

イングリスは ‘a range of mountains nearly as elevated, and of as picturesque forms’ と崇高やピクチャレスクの概念を踏まえて書いており、その風景の雄大さを感じさせる描写を心がけ、具体的な距離などを数字で示すことは最小限にとどめている。この点は数値的な情報を提供するバローとは対照的である。イングリスの後に執筆しているために、新たな情報を提供せざるを得ないバローの立場を露呈しているともいえる。イングリスが語るほどすばらしいフィヨルドではないとする点も、バローが意識的に書いたものであろう。いずれにしても、イングリスはコネマラの風景にいたく感銘を受けたのか ‘sublime’ と ‘picturesque’ を繰り返し用い、その風景への賞賛を強調している点は注目しておくべきである。

写真4：リーナンを臨む

さらにジャック・ジョイスに関する描写でも、それぞれの語りの特徴がきわだっている。イングリスはこの頑強な体躯を持つ大男について、その振る舞いや行動を具体的に語るかわりに、次のように誇り高い心の持ち主であることを読者に印象づける語りを残している。

> The salutation ‘How are you Jack?’ or ‘Jack Joyce, my fine fellow how do you do?’ might be followed by an uncourteous reception. ‘Mr. Joyce, I am delighted to make the acquaintance of the representative of all the Joyces;’ or, ‘Have I the pleasure of seeing before me Mr. Joyce, to whose ancestors this county once belonged?’ would be salutations more likely to ensure a good reception. (Inglis, 1838, p. 250)

イングリスが人物に対する主観的な見解を示すのとは異なり、バローはジョイスと交わした会話の様子を引用を交えて長々と語り、経験した事実を採録する傾向にある。バローにとっ

てはだれに会い、何を話し、何を食べたかといった自分自身の経験と、出会った人たちの情報を提供することが目的となっている。見たものをそのまま率直に語り、素人が感じる現場の雰囲気を生で伝えるバローには、イングリスに比べて旅を楽しもうとする気楽さが読み取れる。

その意味で、この両者の旅行記は補完しあうテクストとも捉えられる。実際その後の数多くのコネマラ紀行において、両者への言及はまるで競い合うかのように繰り返し登場する。いずれにせよ、旅行記には執筆者の人となりを示す語りの魅力は欠かせないものであり、この点は、スコットランドの官僚であったロバート・グレアム（Robert Graham）がコネマラを訪れたときの日記を読むと実感できる。そこには読者の想像力を書きたてるような描写は見られず、とつとつとその日の行動の仔細を語る書き手がいる。本人はこの日記を公にする意図など持ち合わせてはいなかった。仕事上必要な事象も含めて備忘録として書いたとでもいってよいこの文章は、読者にその地を旅したいと思わせ、未知の世界に触れる喜びを感じさせるものとはいいがたい。しかしそれ以上に示唆的なのは、すでに本論執筆者が訪れたことのある場所の描写を読んでいても臨場感が得られないという事実である。旅行記はこれからその土地に出かける人の便に利するものであるとともに、すでに出かけたところについての記述をあとから読んでその旅を追体験するものである[6)]。このことは、バローがイングリスの旅行記を携えて旅したことからも理解できよう。彼はイングリスの文章を頼みの綱として日々訪れる未知の土地に対するイメージを膨らませ、その土地に足を踏み入れたことであろう。そして実際にその土地を見て回った後、再びイングリスの旅行記を読んで自身の体験を思い出して旅を反芻し、さらにイングリスの体験との差異を明確にしながら鮮明な記憶を自分らしい語りにして書き留めた。バローは自身で旅をしたというよりも、イングリスの旅行記によって旅に導かれ、そしてイングリスの文章を読むことで自分自身の旅行経験をもう一度反復し、その喜びを再確認したのではなかったか。バローの旅行記の存在によって、彼が意識してかせずにか、旅行記を本質的におもしろく読む読み方を実践し、読者に旅行記のおもしろさを伝えていることに気づかされるのである。

4．コーダ —— その後のコネマラ旅行記

1830年代のコネマラ発見は突如として起こったものではなく、異なる文化的コンテクストの中で刊行されたテクストがさまざまに読者を開拓してきた背景があってこそのものであった。そして1830年代のコネマラ旅行記の流布によって、交通網の整備が完了した1840年代、著名な作家や著述家がコネマラについて書き記すようになっていく。その中でもＳ・Ｃ・ホール夫妻（Samuel Carter and Anna Maria Hall）がアイルランド各州についてくまなく描き、分冊で出版した『アイルランド —— 風景と風物』（*Ireland: Its Scenery, Character, &c.*, 1841-43）はアイルランドへの関心を急速に高めたといってよい。その1冊1冊には、名所旧跡を描いた図版がふんだんに掲載され、読者が文章を読むだけでなく、視覚的にも旅行記を楽しめるような配慮がなされている。まさに図版は、その土地を訪れたことのない読者が想像力を

巡らせ、実感を得られるようにと提供された仕掛けであり、これこそがこの著作の評価を高めることにつながっている。当然ながら、旅の途中、そして旅から帰った読者に対しても、より臨場感を持って旅を反復する機会を与えたはずである。

1830年代の旅行記にも図版は見られたが、ホールの著作における図版の大きさと多さとは比較にならない。しかし1830年代に、図版ではなく絵画がコネマラの存在を世にアピールしていた事実を忘れてはいけない。旅行記とは異なる媒体をとおしても、同時期にコネマラ発見が展開されていたのである。こうした絵画についての考察は別の機会に譲ることとしたいが、文章と図像のコラボレーションは読者に未知の、そして既知の土地との距離を縮める力があったといえよう。

ちょうどこの時期、19世紀後半に大きな影響力を持つ写真術が登場する。19世紀半ばには、書物や雑誌の図版が実際の風景を示しているという信憑性を担保するため、図版が写真に基づいたものだとする断りが明記されるようになってくる（バジャック, 2003, pp. 122-24）。そしてその後に写真が掲載された刊行物の登場を迎える。写真が旅行に与えたインパクトは計り知れない。ソンタグは写真によって現実を確認することが可能となると同時にその経験が強まることを指摘し、写真によって断片化された情報は単なる複製だけでなく、その再循環によって支配的な力を持つものだと論じている（ソンタグ, 1979, p. 32, pp. 158-59, p. 177）。今や旅行に不可欠となった写真には、旅行記を読む以上の実感をともなった未知の土地での体験の先取りや、手軽ながらも密度の濃い過去の旅の反復を可能とさせる力がある。写真満載の紀行文やガイドブックは巷にあふれ、インターネットを用いて現地へ行ったような錯覚を楽しむことも可能な時代である。そして、本論自体、写真付きで過去の旅行者の旅行記をたどる一種の旅の語りでもある。旅行記とは、その時代時代で新しい要素を自由に取り込むだけの柔軟性を付与され、文化的発信を多角的に構築できるきわめておもしろい変幻自在なジャンルだといえよう。

本稿の一部は、2008年12月26日に第2回オースティン研究会（於 フェリス女学院大学）で行った口頭発表「西アイルランドへのまなざし —— エッジワースのコネマラ紀行を中心に」にて公にしたものである。なお、本研究は、科学研究費基盤研究（C）「アイルランド小説における女性身体と女性空間をめぐる研究」（課題番号20520251）の一部である。

掲載した写真や地図は筆者の撮影や作成による。

注

1）道路完成については、1835年にコネマラを旅行したBarrow（1836）の次の一節で明らかである。‘in most places, as good a road as one could wish to travel on. The fact is, my informant must have alluded to the old road, which I understood to be as bad as it had been described. The new one was only finished this year’ (p. 228).

2）この時点では、1810年代に徐々に建設されていったクリフトンの町は存在しなかった。レンヴァイルはその北東に位置し、コネマラ土着の一族、オフラハティー（O'Flaherty）が住んでいた。

3）マンボウ漁とケルプ灰で知られる地域であることが指摘されている。

4）オフラハティーはブレイクとの間で借地契約を結んで地所を経営していた（Williams, 1995, p. 4）。この背景にあるのは、アイルランドでは18世紀初頭までにいくつかの法律によってカトリック信者の土地相続が禁止された事実である。土地相続のためには、プロテスタントに改宗するか、縁故などによる特別な処置が必要となった（Harvey, 1996, p. 298）。

5）アイルランド旅行記としての判断はJohn McVeagh（1996）に準拠してよかろう。1750年から1850年の間に刊行された旅行記は570点におよび、そのうち40点がヨーロッパ大陸からの旅行者によるものである（Williams, 2008, pp. 16-17）。

6）旅行記を読むことが、過去の旅行を思い出して反芻するという追体験を可能にさせるものである点については、下楠（2005）より多くの示唆を得た。

References

1. Primary Sources

Anon. (1837), *The Irish Tourist; Or, the People and the Provinces of Ireland*, London: Darton and Harvey.

Barrow, John (1836), *A Tour round Ireland, through the Sea-Coast Counties, in the Autumn of 1835*, London: John Murray.

[Bilton, William] (1834), *The Angler in Ireland: Or an Englishman's Ramble through Connaught and Munster, during the Summer of 1833*, 2 vols., London: Richard Bentley.

[Blake, Henry, Martha Louise Blake, and Anne Attersol] (1825), *Letters from the Irish Highlands,* London: John Murray.

[Bougrenet de La Tocnaye, Jacques-Louis de] (1797), *Promenade d'un Français dans l'Irlande, etc.*, Dublin: M. & D. Graisberry.

— (1798), *Rambles through Ireland,* 2 vols., Cork: M. Harris.

— (1799), *Rambles through Ireland*, 2 vols., London: C. G. & J. Robinson.

— (1917), *A Frenchman's Walk through Ireland 1796-7 (Promenade d'un Français dans l'Irlande),* trans John Stevenson, Belfast: McCaw, Stevenson & Orr; Dublin: Hodges, Figgis.

Crowe, Eyre Evans (1825), *Connemara*, vol. 2 of *To-day in Ireland,* London: Charles Knight.

Edgeworth, Maria (1894), *The Life and Letters of Maria Edgeworth*, ed Augustus J.C. Hare, 2 vols., London: E. Arnold.

— (1950), *Tour in Connemara and the Martins of Ballinahinch*, ed Harold Edgeworth Butler [1834], London: Constable.

[Ferguson, Samuel] (1836), 'The Attractions of Ireland. — No. I. Scenery', *Dublin University Magazine* 8: 112-31.

— (1836), 'Attractions of Ireland. — No. II. Scenery and Society', *Dublin University Magazine* 8: 315-33.

— (1836), 'Attractions of Ireland. — No. III. Society', *Dublin University Magazine* 8: 658-75.

Fraser, James (1838), *Guide through Ireland: Descriptive of Its Scenery, Towns, Seats, Antiquities, etc.*, Dublin: William Curry, Jun.; London: Samuel Holdsworth; Edinburgh: Fraser.

Hall, S.C., Mr. and Mrs. (1841-43), *Ireland: Its Scenery, Character, &c.*, 3 vols., London: Jeremiah How.

Heaney, Henry (ed) (1999), *A Scottish Whig in Ireland 1835-38: The Irish Journals of Robert Graham of Redgorton*, Dublin: Four Courts.

Inglis, Henry D. (1838), *A Journey throughout Ireland, during the Spring, Summer, and Autumn of 1834*, 1834, 5th ed., London: Whittaker.

Lover, Samuel (1853), *Legends and Stories of Ireland,* 1831, London: H. G. Bohn.

Maxwell, William Hamilton (1832), *Wild Sports of the West: With Legendary Tales, and Local Sketches*, 2 vols., London: Richard Bentley.

[Otway, Caesar] (1827), *Sketches in Ireland: Descriptive of Interesting, and Hitherto Unnoticed Districts, in the North and South*, Dublin: William Curry, Jun.; London: Charles Tait; Edinburgh: W. Blackwood.

— (1839), *A Tour in Connaught: Comprising Sketches of Clonmacnoise, Joyce Country, and Achill,* Dublin: William Curry, Jun.

[Pückler-Muskau, Prince Hermann Ludwig Heinrich von] (1830), *Briefe eines Verstorbenen: Ein fragmentarisches Tagebuch aus England, Wales, Irland und Frankreich, geschrieben in den Jahren 1828 und 1829*, München: Franckh.

— (1832), *Tour in England, Ireland, and France, in the Years 1828 & 1829*, 2 vols., London: Effingham Wilson.

Young, Arthur (2006), *A Tour in Ireland with General Observations on the Present State of That Kingdom: Made in the Years 1776, 1777, and 1778 and Brought Down to the End of 1779*, 1779, 2 vols., Boston: Elibron Classics.

2. Secondary Sources

'English Tourists in Ireland' (1837), *Dublin Review* 3: 401-27.

Harvey, Karen (1996), 'Landlords and Land Usage in Eighteenth Century Galway', Moran (ed), *Galway*, pp. 297-318.

Hooper, Glenn (2005), *Travel Writing and Ireland, 1760-1860*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

'Ireland. Third Notice: Continued from page 553' (28 September 1839), *Literary Gazette; and Journal of Belles Letters, Arts, Sciences &c. for the Year 1839*, No. 1184: 615-17.

Kelly, James (1996), 'The Politics of "Protestant Ascendancy": County Galway 1650-1832', Moran (ed), *Galway*, pp. 229-70.

McVeagh, John (1996), *Irish Travel Writing: A Bibliography*, Dublin: Wolfhound.

Moran, Gerard (ed) (1996), *Galway: History & Society*, Dublin: Geography Publications.

Nakamura, Tetsuko (2010), 'Interrelated Travel Discourses on Connemara and Joyce Country in the 1830s', *Journal of Irish Studies* 25: 18-27.

Review of *A Journey throughout Ireland, during the Spring, Summer, and Autumn of 1834, by Henry D. Inglis* (1834), *Monthly Review* 3: 506-19.

Review of *A Tour round Ireland, through the Sea-Coast Counties, in the Autumn of 1835, by John Barrow* (1836), *Monthly Review* 2: 421-31.

'Review of New Books: Ireland. Second Notice' (31 August 1839), *Literary Gazette; and Journal of Belles Letters, Arts, Sciences &c. for the Year 1839*, No. 1180: 553-54.

Robinson, Tim (2006), *Connemara: Listening to the Wind*, London: Penguin.

Villiers-Tuthill, Kathleen (1992), *History of Clifden 1810-1860*, 2nd ed., n.p.

— (2006), *Alexander Nimmo and the Western District: Emerging Infrastructure in Pre-Famine Ireland,* Clifden: Connemara Girl.

Williams, Guy St. John (1995), *A Sea-Grey House: The History of Renvyle House*, Renvyle: Renvyle House Hotel.

Williams, William H.A. (2008), *Tourism, Landscape, and the Irish Character: British Travel Writers in Pre-Famine Ireland,* Madison, WI: University of Wisconsin Press.

— (2010), *Creating Irish Tourism: The First Century, 1750-1850,* London: Anthem Press.

バジャック, クエンティン (2003)『写真の歴史』遠藤ゆかり訳 創元社.

下楠昌哉 (2005)「祠の前でひざまずくひとびと —— 旅行文学・アイルランド・『ドラキュラ』」*A. P. O. C. S.* 3: 47-62.

ソンタグ, スーザン (1979)『写真論』近藤耕人訳 晶文社.

〈資料〉

1830年代のコネマラ旅行に関する記述

次の表は、1830年代にコネマラを旅した様子を記述したテクストが含まれる著作を列挙したものである。刊行されたものについてはその出版年、書かれた当時未刊行のものについては執筆年に基づき時代順に示してある。なお、タイトルの詳細など文献情報はReferencesのPrimary Sourcesを参照されたい。

出版年あるいは執筆年（旅行年）	著者 [ ]:匿名にて刊行 ( ):社会的立場	メイン・タイトル	出版社（出版地）	著作の枠組み	コネマラ内の立ち寄り先
1832（1828-29）	[Prince Pückler-Muskau]（ドイツ人皇族）	*Tour in England, Ireland and France*	Effingham Wilson（London）	イングランド・アイルランド・フランスを旅した記録、書簡体	Cong
1834（1833）	[William Bilton]（イギリス本国人）	*The Angler in Ireland*	Richard Bentley（London）	コナハトとマンスター地方をめぐる旅の記録	コネマラ網羅
1834（1833）	Maria Edgeworth（アングロ・アイリッシュ作家）	*Tour in Connemara*	当時未刊行、編集版が1950年にConstable（London）から刊行	コネマラ旅行の記録、書簡体	コネマラ網羅、特にバリナヒンチのマーティン家に関する詳細を含む
1834（1834）	Henry D. Inglis（イギリス本国人、旅行記作家）	*A Journey throughout Ireland*	Whittaker（London）	アイルランド内陸部を除く全土を巡る旅の記録	コネマラ網羅
1836（1835）	John Barrow（イギリス本国人）	*A Tour round Ireland*	John Murray（London）	アイルランド内陸部を除く全土を巡る旅の記録、書簡体	コネマラ網羅
1836（?）	[Samuel Ferguson]（アルスター・スコッツ作家）	'The Attractions of Ireland'（*Dublin University Magazine* に3回に分けて掲載）	William Curry（Dublin）	アイルランドの風景と社会・文化に関する著作、全土から注目すべき地域を数多く取り上げる	コネマラの風景に関する記述
1835-38（1835-38）	Robert Graham（スコットランド人官僚）	*The Irish Journals of Robert Graham of Redgorton*	当時未刊行、編集版が1999年にFour Courts（Dublin）から刊行	1835年、36年、38年と3回渡愛し、アイルランド全土をめぐった旅の記録、日記	コネマラ網羅

1837 (?)	作者不詳	*The Irish Tourist*	Darton and Harvey (London)	コナハト、マンスター、アルスター、レンスターそれぞれの地方を舞台とした青年向け物語4作	コネマラ網羅
1838 (?)	James Fraser (ダブリン在住)	*Guide through Ireland*	William Curry (Dublin)	アイルランド全土のガイドブック	コネマラ網羅
1839 (1830年代前半?)	[Caesar Otway] (ダブリン在住国教会牧師)	*A Tour in Connaught*	William Curry (Dublin)	ゴールウェイとメイヨー両州をめぐる旅	Joyce Country, Cong